

Numéro245

Mon Nara

Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

Juillet-Août 2011 7,8 月合併号



美術鑑賞会 奈良県立美術館 7月26日 (展覧会期7月16日～8月28日)

空想のきらめき ～シュルレアリスムとイメージ世界～

南城 守

昨今の漫画やアニメの世界的なブームは、大人も子供も巻き込んで止まるところを知りません。この平成のジャポニズムにたとえられる流行は、日本美術の伝統的な絵物語や浮世絵版画の芸術性を継承した、新たなるイメージ世界の発信といえるのではないのでしょうか。

思い起こせば、昭和30年代～40年代に子供たちの心を捕らえたのが「空想科学漫画」でした。手塚治虫や横山光輝が描き出す世界に引き込まれ、寝食を忘れた経験は熟年世代の誰もが持ちうるもので、「空想」という言葉の響きに、未知の探検に誘われるワクワク感



熊本正義「ワシリー寺院<リボンと風船のたわむれ>」1972

を抱き、一瞬にして異次元空間にワープしたものだと思えます。私にとっては空想する楽しみが高じて、美術の道に入り込んだようなものですが…。いずれにせよこの魔法のような言葉は、精神的にも肉体的にも困難な状況にある人間を救うキーワードになる、と思えてなりません。

その空想のきらめきを美術館で体感してもらい、明日へのパワーに繋げてもらいたいと企画したのが本展です。サブタイトルがシュルレアリスムとイメージ世界。人間の「想像・創造力」を喚起し、人々を空想の世界に誘う絵画、とりわけイメージの解放運動と称されたシュルレアリスム(超現実主義)と心象風景(イメージ画)は、空想のきらめきを堪能していただくにふさわしいものといえるでしょう。夢や幻想や奇想の不思議世界は、時として千変万化する人間の真情を捉え揺さぶり、琴線に触れるものです。

同時に人間の「想像・創造」する力は無限であり、百花繚乱の個性の輝きを放つものだということを教えてください。

私は今、日本人に最も大切なことは、空想する楽しみを思い起こすことだと思っています。何もない空間に自分のイメージを浮かび上がらせ、そしてより具体的にその映像を練り上げる。つまり「想像・創造」していく楽しみは人間の最も根源的なところにある欲求のようなもので、どのような苦難に遭遇しても、空想力が大いなる希望の扉を開いてくれると考えています。

未曾有の不幸が東北を襲った3月以来、いまこそ美術の力が求められているのではないかと感じます。人々の心の痛みをほんの一瞬でも忘れることができ、そして日常の多忙と喧噪を忘れて、理屈抜きに楽しんでもらうために、イマジネーションの宝庫である美術、芸術の力を信じたいと思います。

今回の展覧会は、子供はもとより、大人の方々にも見てもらいたいと願っています。見終わった後、久しぶりに何か絵を描いてみたいとか、何かを作ってみてみたいと思っただけならば望外の喜びです。共に空想の楽しみを広げ、想像力を鍛えて行きましょう。



美術鑑賞会に参加して

綿貫和子

毎年参加しているこの会、今年は「シュルレアリスムの世界」と知り、より一層好奇心と期待をもって参加した。画家南城守氏の案内で会場に入った私は、一作目から目を奪われた。透明感のある色彩から優しい音楽が響いてくる。画家は孫の夢の中を描いたそうである。南城氏の解りやすく噛みくだいた説明により心象風景、視覚トリックの試みそして抽象絵画へと、様々な作品が心地良く私の頭と心に広がった。

名句の花束 (16)

副会長 三野 博司 (奈良女子大学教授)

この子たちがどんな罪を、どんな過ちを犯したというのか
 (Quel crime, quelle faute ont commis ces enfants)
 ヴォルテール「リスボンの災厄についての詩」 (1756)

1755年のリスボン大地震が、4年後に発表された『カンディード』執筆動機の一つであったと前回述べました。しかし、それよりいち早く、ヴォルテールは、地震を知ってすぐに一篇の詩を書いて、「この世はすべて最善のものとして作られている」とするライプニッツ流の楽天主義に不信を抱き、神の摂理に対して疑問を投げかけます。それが地震の翌年1756年3月に発表された「リスボンの災厄についての詩 Poème sur le désastre de Lisbonne」です。

詩の冒頭から、ヴォルテールは「すべては善である Tout est bien」と叫ぶ人々を攻撃し、そうした態度を愚かで、臆病な自己満足だと批判します。「<すべては善である>という語を厳密な意味で、しかも未来の希望もなく把握すると、これはわれわれの人生の苦しみに対する侮辱にほかならない……」。神が自由で、正義を行い、慈悲に満ちているなら、そうした公正な支配者のもとにあって、どうして私たちが苦しむことになるのか。そして伝え聞いたリスボン大地震の惨状について、こう問いかけるのです。

「この子たちがどんな罪を、どんな過ちを犯したというのか

(Quel crime, quelle faute ont commis ces enfants),
 母の胸の中で押しつぶされ血まみれのこの子たちが。
 今はなきリスボンが、歓楽におぼれるロンドンやパリにもまさる悪徳の巷であったというのか」

こうして、ヴォルテールは従来楽天主義を捨てて、すべては悪であるという立場を採用するに至ります。

他方で、この詩篇を読んだルソーは、1756年8月、「ヴォルテール氏への手紙」において、逆に摂理を擁護する立場を明らかにします。彼は、被害の原因のほとんどは、都市の構造や、住まい方、そして市民の貪欲さにあると述べるのです。人間社会の悪を産み出したのは人間自身であると『人間不平等起源論』以来の彼の持論を展開します。

「私は、大部分の物質的な悪はやはり私たちの産物であることを証明したと思っています。リスボンに関するあなたの主題から離れずに言えば、たとえば、自然のほうからすれば、なにもそこに6階や7階建ての家を2万軒も集合させることはまったくなかったことを考えてみてください」

すなわち、彼は大都市に人が密集するから惨禍がひどくなるのだと、反都市=反文明の立場から反駁します。第1回目の地震のときに全住民が安全な場所に逃げ出していたなら、被害ははるかに少なかっただろう。しかし、人々は自分の財産や持ち物に執着して、その場を離れなかった。



「この大震災で、ある者は服、他の者は書類を、別の者は金を、持ちだしたいがために、どれほど多くの人々が不幸にも命を失ったことでしょうか」

のちになって、ルソーは自伝『告白』のなかにおいても、「ヴォルテールへの手紙」について触れています。そこで彼は、ヴォルテールのような栄光と幸福に包まれた人間が、自分自身は災厄をまぬがれているのに、その災厄の恐ろしい光景を描き出して、神は人に害を与えることだけを楽しみにしているなどと主張するのはいかにも不条理だと書いています。他方で不幸な境遇にある自分は、人間のあらゆる不幸を吟味して、公平に検討したと、ルソーは言うのです。

「あらゆる不幸のうちで、神の摂理に罪があるような不幸は一つもなく、不幸の源は自然そのもののなかにあるよりは、人間がその能力を乱用したことにある」

このことばに従えば、原子力もまた人間の能力の乱用の結果だということになるでしょう。

ヴォルテールとルソー、18世紀のフランス思想における2人の巨人が、こうしてリスボン大震災に対する態度によっても、その相違を際立たせ、このあと両者は決定的な対立関係に入るのです。

Junko のパリ便り (3)

～バカンス～

高橋 潤子

「夏のバカンスはどうするの？」

5 月も半ばになると、職場でもプライベートでも決まり文句のように登場するセリフである。ほとんど時候の挨拶と化しているのではないかと密かに思っている。フランスでは夏＝バカンスなので、この時期には最も会話が弾みやすい無難な話題となるのだ。

フランスで有給休暇が初めて登場したのは、1936 年人民戦線内閣の元でのことだった。この年はよくバカンス元年と言われる。当時 2 週間と定められた有給休暇は 1981 年の社会党政権以降 5 週間となっている。

有給休暇を取ることは国民の権利であり、それを取らせることは雇用者の義務である。ただしこれはあくまでも一般の被雇用者の権利であり、雇用されて 1 年未満の労働者や、自営業者などは取得することができない。年間で 5 週間なので、大部分の人は夏に 3 週間、クリスマスの期間に 2 週間、あるいはシーズンごとに 1 週間ずつなどと分割して取っている。

2010 年の調査によると、世界の主な国 24 カ国の中でフランスの有給休暇の完全取得率は約 90% と世界一だった。ちなみに日本は 33% で断トツの最下位だそうである。

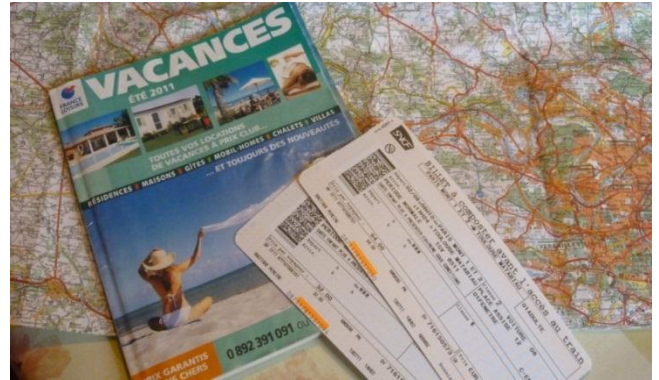
夏のバカンスの人出は、やはり 7 月、8 月に多い。子供のいる人は学校休暇に合わせてバカンスを取るため、その時期に人口大移動が起こるのだ。子供のいない人は 6 月や 9 月にバカンスを取ることも多い。うるさい家族連れがいなくて静かだし、ピーク時に比べて値段もかなり安いからである。住民もこぞってバカンスに出るため、夏のあいだパリはガラガラになる。中心部は観光客がやってくるからいつもに増して賑やかだが、住宅地は 8 月など閑散としている。静かなパリも悪くない。

一度に多くの人がバカンスを取ると、さぞかし業務が滞るのではと思われるかもしれない。ご明察の通りである。問い合わせをしても「担当の〇〇は今バカンスだからわからない」で終わりだ。中小企業や個人商店では、会社や店自体を数週間完全に閉めてしまうこともある。

フランスでは「夏には普段にも増して物事がスムーズに運ばない」というのは常識なので、それを前提とする必要が生じてくる。6 月に医者予約をしようと電話する場合、予約が取れるのは早くても 9 月半ばだろうとあらかじめ予想しておけば腹も立たない。郵便局も社会保険庁も税務署も普段の半分ぐらいの人数で回っているのだから、すぐ返事が来なくても、頼んだ書類が未だにできていなくても、それは当たり前、仕方のないことなのだ。普段怒りっぽいフランス人がこれには怒らない。自分もバカンスを取るのだからお互い様だと思っているのだろう。

さて、フランス人はどんなバカンスを過ごすのか？ クルージングや南米旅行など豪華なバカンスを過ごす人もいるが、一番多いのは海か山、あるいは田舎でのんびりというパターンである。例えば海辺で 2 週間ほど過ごす場合、宿泊先はキャンプ場や貸別荘で食事は自炊、毎日海で泳いだり、散歩や昼寝をしたり、という感じである。バカンス (vacance) という言葉自体が「空の」「暇な」(vacant) という意味を持つことから察すると、「何もしない」というのがバカンスの究極の価値なのかもしれない。お金も気も使わないでのんびりできるのなら、それに越したことはないのだ。

友人たちにバカンスの予定を聞いてみた。多かったのが実家で過ごすというもの。日本に里帰りする人もここに入るだろう。近隣諸国への旅行というのも結構あった。交通手段は車が多い。夏は海も人気だ。レ島やサンマロ、アルカション、イエールといった海岸が挙げられた。私も 8 月上旬は南仏の義理の両親の家で過ごす。最寄りのスーパーまで 3 km、地中海までは 200 km という内陸の田舎だから、ボーっと過ごすしかない。当初は 3 日もすれば暇で暇で仕方がなくなっていたのが、今では何もしないのに 2 週間があっという間に過ぎてしまう。これがフランスに慣れたということなのだろうか？



第 101 回 フランス・アラカルト開催 ～日仏交流の歴史をさかのぼって新井白石に～



第 101 回のフランス・アラカルトは、2 回続けて来てくれたオーレリアン・アラルの友人でもあるロマン・ジュルダンさんでした。オーレリアンさんは、日本文化の細部にこだわりながら、そこから全体像を浮かび上がらせる見事な手法を取っておられました。ロマンさんは、日本におけるフランス文化の受容からはじまり、日本と西洋文化との交流の歴史をさかのぼって、新井白石にたどりつかれました。歴史の教科書には必ず出て来るので、われわれ日本人にとっても知られた名前ですが、さて、どんなことをした人物なのかはあらためて問われたら困ります。ロマンさんは多くの日本人が知らない、あるいは忘れていた江戸時代初期の西欧と日本との交流、あるいは「外」に向かって学び続けていた日本人の姿勢、存在を認識させてくれました。

また、彼の日本語の知識はまさに驚くべきもので、一言一句言葉をかみしめつつ、日仏両語の間を行き来していたのが印象的でした。その一方、ロマンさんは bon vivant、つまり人生の楽しみ方を知っている若者です。シャンソン、詩、舞踊、ワイン、さまざまな分野においてフランス文化の素晴らしい紹介者でありました。一度と言わず、また来てもらいたいですね。

亀岡恵美子

7 月 14 日、学園前のカフェ Mardi Mardi に 11 名が集い、フルーティな白ワインで Santé !

オードブルと深い味わいの渋めの赤ワインは、デキャンタに移し、空気を含ませてまろやかにして・・・。

第 101 回フランス・アラカルトは、ロマン・ジュルダンさんがゲストです。

京都大学博士課程で新井白石を研究されており、語学も 10 カ国語に堪能な、イケメンの爽やかな 29 歳の好青年。5 年前に来日され、日本人の奥様もいらっしゃるようですが、その来日の動機がなんと「江戸時代の日本人が、西洋に対してどんな思いを持っていたか」。

日本のアニメや漫画、黒沢明の映画の影響を受け、マルコ=ポーロの“東方見聞録”で黄金の国ジパング、富と繁栄のあこがれの国として、ヨーロッパの人々の好奇心を刺激した日本に興味を持ち、日本語を勉強することになったそうです。

皆の活発な質問に丁寧に答えていただきました。我々が詳しく知らない鎖国時の長崎出島には、15 名程が居住しており、あまり教養のないドイツ人やオランダ人商人と、一人の外科医で理髪師でもあったオランダ人しか受け入れられないので、出島に出張機関のあったオランダ東インド会社に雇われた形で、ドイツ人等も入国していたとか。彼は、新井白石の活躍した江戸中期から中江兆民の生きた 1900 年代初めに興味を持っておられ、新井白石の著書である西洋地理書の“采覧異言”を持ってこられました。1700 年頃の世界地図や日本の漢文も研究されておられました。

最後に、彼が用意されていたシャンソンの歌詞（実はサーカスの歌った“ミスターサマータイム”の原曲）を皆でフランス語で合唱。合気道の練習があるからと、熱い余韻を残して帰られました。

<次回フランスアラカルトのお知らせ>

第 102 回のアラカルトは、まだゲストが決まっていません。ホームページ上でお知らせしますので、こちらのページをご覧ください。

<http://www.afjn.jp/>

日 時 : 9 月 15 日 (木) 15 時から
 会 費 : 会員 1000 円、非会員 1500 円 (お菓子とドリンク付き)
 場 所 : カフェ「Mardi Mardi」(マルディ・マルディ) *

<http://mardimardi.exblog.jp/11477753/>

問い合わせと申込み : 奈良日仏協会事務局 E-mail afjn_info@kcn.jp

TEL/FAX 0743-52-3939

*奈良市登美ヶ丘 3 丁目 12-9 登美ヶ丘ビル 1F (TEL/FAX:0742-44-5701)
 学園前駅からバス (110・128・129・130・138・260 番) で 7 分、
 西登美ヶ丘二丁目バス停すぐ (駐車場あり)

パリ祭祝賀レセプション ～7月14日・関西日仏学館～

坂本成彦

フィリップ・ジャンヴィエ＝カミヤマ在京都フランス総領事の主催のもと、パリ祭の祝賀レセプションが開催された。山田啓二京都府知事、門川大作京都市長をはじめ多数の関係者が出席し、軽食とワインで和気あいあいの交流を深めた。今回は、総領事館が京都へ移転して2回目のパリ祭であり、特に東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の現場で消防・救援活動などに関わった京都、兵庫、大阪各自治体の代表も10数名招かれ、総領事の祝賀挨拶の際に壇上で紹介された。当協会からは、会長と4副会長が出席し、他の日仏協会をはじめ関係者との交流を深めた。

例年、パリ祭レセプションは、東京・フランス大使公邸でも開かれてきた。フォール駐日大使の「今年は被災地で開き、被災者を招きたい」との強い意向のもと、福島県郡山市に会場を移して開かれ、本国からはフレデリック・ミッテラン文化相もこの式典に加わった。フランス大使館によるパリ祭レセプションが東京以外で開かれるのも、また現職閣僚が海外のレセプションに出席するのもはじめてのことである。

フランス生まれの手芸講座のお知らせ Fleurs lyophilisees leçon

暮らしの中にフランスを感じる、フランス生まれの手芸講座。

今回も、ナチュラルなセンスあふれるアトリエレッスンが大人気の古川さやかさんにお越しいただき、トピアリーアレンジを教えてくださいます。

置き場所を選ばない小さな器に、あなただけの秋色のトピアリーを作りませんか？
お花に触れて、花のあるひとときを楽しみましょう！
会員対象の講座ですが、非会員の方の参加も大歓迎です。



と き : 9月17日(土) 13:30～

と ころ : カフェテラス サンフラワー

奈良市芝辻町4丁目9-3 アルファビル1階

近鉄新大宮駅下車 北へ徒歩5分(年金事務所南側)

駐車場有(ご利用希望の方はお申し出ください)

参加費 : 4000円(材料費、レッスン料込、1ドリンク付)

定 員 : 16名(先着順)

講 師 : 古川 さやか

フラワーコーディネーター「vert de gris flower」主宰。

ナチュラルで色彩豊かなフラワーアレンジメントレッスン「vert de gris flower time」が大好評。

お問合せ：参加申込み 中野まで(090-7750-8570)



協会の所在地について

当協会は、グリーンホテル馬酔木内「レストランらんぷりーる」気付を所在地として表記し、メール便等の受け取りをしてきました。ところが、6月末の「レストランらんぷりーる」閉店にともない、新たな協会所在地をいろいろ探ってきました。臨時理事会を開催して検討した結果、「公開する所在地を持たず、書類などの受領は全て郵便局私書箱にお願いする」と決めました。以下の文面がホームページにも掲載されていますので、ご覧いただけますようお願いいたします。

「書類をお送りいただく方々へ

今後、当協会にお送りいただく書類は、全て以下宛てにお願いします。

〒630-8691 郵便事業株式会社 奈良支店 私書箱第30号

誠に恐縮ながら、宅配便・メール便等は、受け取ることができません。これらの配達サービスには転送の取り扱いがなく、従前の所在地に送付されても当協会に届くことはありません。事情をご理解の上、ご配慮の程よろしくお願いいたします。」

第 25 回 奈良日仏協会シネクラブ例会の案内

日 時	9月11日(日) 14:00~17:00
会 場	ワルハラ・スタジオ (JR 奈良駅近く)
プログラム	『ユキとニナ』(Yuki & Nina, 2009年, 93分)
監 督	諏訪敦彦 & イポリット・ジラルド
参 加 費	日仏協会会員 無料 非会員 300円 (高校生以下 無料)
問い合わせ	浅井直子 Nasai206@aol.com

昨年後半から今年前半にかけての「フランス文学の翻案作品」特集では、文学作品を映像と音声を通じて表現された作品と対照することで、映画ならではの表現様式の多様性と、原作の文学作品のもつ奥行きを同時に再認識する、いい機会となりました。さて9月からは新たに、「子供」をテーマにした作品を取り上げていきます。

第1回目は『ユキとニナ』、この作品は諏訪敦彦(日本人)とイポリット・ジラルド(フランス人)の共同監督で、2009年のカンヌ映画祭監督週間に正式出品されました。日本人のお母さんとフランス人のお父さんが突然離婚することになり、生まれ育ったパリを離れ、親友のニナと別れて、日本で暮らすことになったユキ(9歳)の心の葛藤と成長の物語です。

主演の二人の女の子の存在感がとても素晴らしく、つい微笑んでしまいます。フランスの森と日本の森のシーンが圧巻で、何かしら特別な「時間」が流れているらしいことを、即座にわからせてしまう映画の力に感服です。木々がざわめいて、セミの鳴き声や水の音が聞こえたら、そこは……。

尚、これまでシネクラブで取り上げてきたプログラムが、奈良日仏協会ホームページ(<http://www.afjn.jp/>)に掲載されていますので、フランス映画に興味のある方はぜひご参照なさってください。

奈良日仏協会シネクラブ・番外篇「第1回フランス・オペラの集い」

日 時	9月24日(土) 14:00~17:30
会 場	ワルハラ・スタジオ (JR 奈良駅近く)
プログラム	『ペレアスとメリザンド』(Pelleas et Mélisande, 1902年パリにて初演)
作 曲 家	クロード・ドビュッシー (Claude Debussy)
解 説	三野博司(奈良女子大学文学部教授)
参 加 費	会員 500円 非会員 600円
問い合わせ	浅井直子 Nasai206@aol.com

わたしたち奈良日仏協会には、オペラ鑑賞に興味をもっておられる会員の方も少なからずおられるようです。そんな方たちの希望に答えて、このたびシネクラブでは通常の例会とは別に、フランス・オペラの世界を取り上げる機会をもつことになりました。第1回目は作曲家クロード・ドビュッシーが完成させた唯一のオペラ『ペレアスとメリザンド』(1902)です。チルチルとミチルのお話で有名な『青い鳥』(1909)の作者で、ベルギーの象徴派詩人モーリス・メーテルランクの戯曲『ペレアスとメリザンド』(1892)をもとにして、オペラの台本は書かれています。20世紀になって初演されたこの作品は、近代オペラの傑作とされ、伝統的なイタリア・オペラやヴァーグナー・オペラがもつ力強さや劇的表現とは異なる、つつましくひそやかで、曖昧模糊とした夢幻的な味わいが特徴です。

原作のメーテルランクの戯曲とドビュッシーのオペラは、物語の筋書き自体はほぼ同じですが、それぞれの作品に独特の世界観があるようで、その違いを味わってみるのも一興です。メーテルランクの戯曲『ペレアスとメリザンド』は、フランス語の対訳付きの版が岩波文庫に入っていますので、書店で簡単に入手することができます。この暑い夏、夕涼みがてらの読書の楽しみとして、しばしの間、メーテルランクの「水」の世界に浸ってみるのもいいかもしれません。そして「オペラの集い」の当日には、奈良女子大学でかつてこの戯曲について講義されたことがあり、ご自身がオペラ好きでもある三野博司先生が、簡単な解説をさせていただきますので、そちらもまた楽しみです。

フランスからのお客さま、ホームステイ

奈良日仏協会では、奈良県観光局国際観光課の依頼を受け、7月下旬に開催された国際セミナーへの参加者を日本の家庭に滞在してもらう「ホームステイ」の実現に協力しました。

この行事は、(財)自治体国際化協会が主催する「海外自治体幹部交流協力セミナー」の主要部分を奈良県が引き受けたものです。主な内容は、奈良における観光をテーマにした説明、世界遺産等の観光資源の視察、意見交換などでした。今回はフランスが対象で、4名の自治体幹部職員が参加し奈良を訪れました。

ホームステイの実施時期は、7月22日から24日までの2泊3日。当協会は奈良県在住の会員に呼びかけ、長子雅子さん、吉水和子さん、中野愛弓さん、及び小寺順子さんが受け入れてくださいました。

小寺順子

この度日仏協会様のご依頼によりアキテーヌ州ロット・エ・ガロンヌ県ネラック市事務総長のSolange Poloniさんの2泊3日のホームステイをお引き受けしました。Solangeさんは2年前にも福岡の方に来られたとかでしたが、日本という遠い国に来るのが夢なのだと語ってくださいました。

1日目の夜はそろそろ日本料理にもあきらめたのではと、ワインバー「ピコレ」にお連れしたのですが、なんと昼間フランス料理を召し上がったとかで失敗。それでもアントレとチーズとアペリティフ、ワインを楽しんでくださいました。

2日目はどこに行きたいかと伺うと京都とおっしゃったので清水寺へ。奈良視察というお仕事でお疲れが出ないようにと特急で京都まで行きました。Solangeさんにとっては見るものすべてが感激という様子で、清水寺では盛んに写真を撮っておられました。

清水の舞台から実際飛び降りた人が何人もいて、飛び降り禁止令が出たのですよと説明すると驚かれていらっしゃいました。また二年坂、三年坂のお土産物屋の探索も楽しそうで、有名なイノダコーヒーでしばし休憩を取りましたら庭を一生懸命撮影していらっしゃいました。でもとりわけ感激なされたのが石堀小路。あの狭い迷路のような一角にある「紅蝙蝠」という日本料理店で昼食をとると大変喜んでおられました。その後八坂神社でしばし琵琶の演奏を聴いて帰路に。少し時間が余ったので伊勢丹に寄ると、soldeを喜ばれ何をかうかあれこれ目移りがし、バッグを買われました。やっぱり同じ女性なんだと共感に浸りました。この日の夜はポートワイン入りメロンの前菜と冷やしうどんを作り、デザートに大阪で有名な「堂島ロール」を召し上げていただきました。

最終日は奈良日仏協会理事の仲井さんとともに今西家書院で昼食を取りました。仲井さんはフランスの地方行政のシステムにご興味をお持ちで、行政機構そして政治の話などを熱心に聞いていらっしゃいました。その後また迷路のような奈良町でお茶を飲み、帰り道では御嬢さんに浴衣のセットを買われました。そしてタクシーで集合場所奈良日航ホテルに行き、次はぜひネラックの方に遊びに来てくださとおっしゃってください、名残惜しいbisesで何度もお別れをしました。

私にとってはとても充実した楽しい3日間でしたが、Solangeさんにとってはどうだったでしょうか。

次はネラックに行ってみたいなと思いながら我が家に帰りました。

長子雅子



去る7月22日から24日、フランスからのゲストのホームステイを受け入れました。パリから30kmのBussy-Saint-George市からの男性の方が、奈良での6日間の滞在中の2泊3日を私の家で過ごされました。最初は私の拙いフランス語で大丈夫か緊張の連続でしたが、大変気さくな方で博多から帰省した夫も加わり徐々に会話も弾むようになりました。

日本の家庭の靴を脱ぐ習慣や洗い場があるお風呂など知ってはいても実際目の当たりにすると文化の違いを肌で感じられたようです。初日の夕食は手巻きずしと肉じゃがでしたが大変喜ばれ、生ものは苦手かなという私の不安を払拭してくれました。特に鰻と肉じゃがはかなりお気に召した様子でした。

既に奈良の主な観光地訪問、茶道、居酒屋や旅館体験までされてからの滞在でしたので、翌日はご本人が興味を持っておられた京都へ観光に行きました。金閣寺と龍安寺、そして清水寺から八坂神社への道を散策しましたが史跡は勿論のこと、何気ない裏通りの佇まいなどにも興味を持たれ写真を取られていました。私たちがパリの名もない通りに異国情緒を感じるのと同じなのでしょうね。娘達の片言の英語とボディランゲージにも勘の良さを発揮して一生懸命お話をしてくださり、彼女達にも大変貴重な経験となりました。別れ際、短い期間だったが密度の濃い楽しい時間を過ごすことができたとおっしゃってくださいましたのが嬉しかったです。最後にこのような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。

野菜ダイニング「菜宴」オープンに寄せて

森 裕子



7月7日にオープンしたばかりのレストラン「菜宴」へランチに行ってきました。店内は明るく、パティオが開放的な雰囲気をつくっています。簡素で落ち着いた内装なのにお洒落で、いっぺんに気に入ってしまいました。入口付近は壁側にカウンターがあり、おひとりさまでも気軽に入れそうです。

1500円のランチ(850円～)をいただきましたが、オードブル(海の幸たっぷりのカルパッチョ風)にカップスープ、サラダが付き、メインの赤ワインソースの牛肉のローストが絶品でした(お魚も選べます)。パン、ご飯はお好みで。お米は奈良市内の契約農家の減農薬米です。スイーツも美味しく

て、コーヒーまたは紅茶も付いていて、大満足でした。ドリンクも種類が多く、お手頃価格です。

オーナーシェフは、「レストランらんぷりーる」を運営されていたときから奈良日仏協会を陰で支えて下さっていた久保田耕基さん。野菜ダイニングとは、メインとともにたっぷり野菜が食べられる、ということだそうです。ぜひまた訪れたいお店です。 近鉄奈良近く小西通り商店街南側(啓林堂より一軒おいて北隣文具屋さんの2階)

昼 11:00~14:30 夜 17:00~22:30

TEL 0742-26-0835

梨里香さん出演のシャンソンコンサート

「シャンソニエ ジルベール・ベコーコレクション2011」と題して、9月10日(土)にNHK大阪城ホールにてシャンソンコンサートが開かれます。構成・演出は出口美保。当会員の梨里香さんも出演されます。

開場 17時、開演 17時30分。前売 4500円、当日 5500円。詳細は、同封のパンフレットをご覧ください。

2011年度 第4回理事会報告

日時 2011年7月25日 10:00~12:00

場所 グリーンホテル馬酔木 5階会議室

出席者 坂本会長、三野副会長、濱副会長、ジャメ副会長、浅井理事、井田理事、高尾理事、仲井理事、樋口理事、三木理事、森井理事

議事 ①協会の新所在地について

②奈良県依頼、ホームステイ

③フランス総領事ご招待 La Fête Nationale Française レセプション

④美術鑑賞会、クラブ活動、次の活動計画

④その他

皆様の投稿を常時募集しています!

モンナラでは会員の皆様の投稿を募集しています。論文、エッセイ、旅行記、最近の出来事、会員の皆様の活動などジャンルは問いません。なお、文章は、意味を変えない表現の変更等をさせて頂く場合があります。予めご了承下さい。奇数月20日が締切です。

Mon Nara Juillet-Août 2011 7,8月合併号 Numéro245

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: afjn_info@kcjn.jp TEL&FAX 0743-52-3939

〒630-8691 郵政事業株式会社奈良支店 私書箱30号(郵便物)

発行責任者: 坂本成彦

